

当クリニックにおける「遺伝子検査」のケースを紹介したい。すでに本稿でインプラント治療での検査利用例を紹介しているが、今号紹介するのは環境的要因が大きく関係する「ガン発現遺伝子検査」のケースだ。

紹介するのは、六十七歳男性・会社経営者の症例。

この男性患者は、舌の下の口腔粘膜にたびたび口内炎ができていたが痛みもないので放置していたが、最近少し気になって来院した。

「ガン遺伝子発現検査」を行ったところ、数種類のガン関連遺伝子が優位に見つかったため大学病院で細胞の検査を行った。幸い結果はまだガン細胞は検出されず前ガン状態という粘膜変化の状態だったため、予防のために喫煙や飲酒を控えて食事等の生活習慣を変えた。

明らかに口腔内の環境はよくなり



口内炎も出なくなりました。また二度目の遺伝子検査はしていないが、生活習慣を変えたことにより毎日ハリが出てきたという。明らかに免疫力が戻ってきたと思われる。

多くのガンは、喫煙や食生活などの生活習慣が原因となる。

痛みもなく少量の採血だけで簡単にできるこの遺伝子検査は、このように病気(ガン)になるかなり前の状態(前ガン状態)で、その人の生活習慣を劇的に変えることができる。なかなか禁煙ができなかった前出

遺伝子検査で変える、悪しき生活習慣

の患者さんが、検査のあとすぐに自らタバコをやめ、生活習慣を変えたのだ。

ガン治療は、早期発見、早期治療と言った。だが今の医療レベルで、早期発見、されるのは、遺伝子レベルの変化があつて、さらに十年以上上つたガン。言わば、成長し切つたガンだ。

最新の画像診断装置で捕捉できる極小のガン(最小で五、六レベル)でも、ガン発現から、十年近くつた言葉は悪いが、立派なガン病巣だ。こうなるといくら小さなガンでも治療のプロセスに入ることに。

ただ、ガンの発現遺伝子や抑制遺伝子の動きを調べることで、病気になるリスクを知り、未然に病気を防ぐこと「超早期予防」が可能な時代が到来している。

ガンにかかる前に健康意識をこれほど見事に変えることができる遺伝子検査は、これから進むべき医療の未来「テーラーメイド医療」のもっとも大切なツールにもなる。

ガンなどの生活習慣病にかかっていた医療費だけでも八兆円

を超える時代。この遺伝子検査が予防医療として定着することで医療費削減につながるかと期待されている。

クリニックでは病気にかからない生活の効果的な実現を図るために長寿遺伝子「サーチュイン遺伝子」検査も行っている。

誰もが持っている長寿遺伝子の基準値を検査して具体的な生活改善や予防療法を選択。健康意識の改革を指導し老化を遅らせることで健康長寿を目指すことができる。

このようにDNA配列を解説する技術が飛躍的に向上し、誰でもが自分の遺伝子情報「パーソナルゲノム」を知ることができるようになった。

アメリカでは遺伝子情報から病気のリスクを知り、早めの対策をとるためにパーソナルゲノムを解説する人が増加しているとも聞く。

日本でも病気の「予防」にゲノムを利用する事例が増えつつある。

日本でも病気の「予防」にゲノムを利用する事例が増えつつある。

亀井英志(かめい ひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒業。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。



顎関節症

ドライマウス

舌痛症

亀井英志
Kamei Hideshi

ストレスは
見える!

すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとき「歯を食いしばっている。心当たりの方は、当コラムの亀井英志の著書「すべては「噛みしめ」が原因だった」をお読みいただきたい。*未病の原因をまとめた良書です。